

小田原文学館

「坂口安吾」

ができるまで展 - 記念朗読会 -

坂口安吾 「ぐうたら戦記」(昭和 22)

牧野信一 「坂口安吾君の『黒谷村』を読む」(昭和 10)

朗読 部(しとみ) 英治

記

日時：8月3日(土) 17時～18時30分 (開場 16時30分)

会場：おだわら市民交流センター UMECO 会議室4 (定員 39名)

参加費：無料

会に先立ち、市内文学散歩(坂口安吾・三好達治住居跡等見学)を実施予定。(15時文学館前集合となります。)

主催：牧野信一の文学をたたえる会

後援：小田原文学館、西さがみ文化フォーラム

お申し込みは下記まで(先着順、定員に達し次第締切)

◆牧野信一の文学をたたえる会事務局

小田原(小泉方) TEL: 090-5409-3071

東京(コネクト内 熊谷) TEL: 042-440-7772 / FAX: 042-440-7773 E-Mail [marito@connec.co.jp](mailto:marito@connec.co.jp)

# 太平洋戦争開戦当日を、坂口安吾は小田原で迎えた

## ■坂口安吾の小田原滞在について

坂口安吾（炳五）にとってやや腰を落ち着けたといえる一九四〇（昭和一五）年の小田原での滞在は、安吾自身の生き方もふくめて文筆で身を立てようとした修行時期であった。その生活の人知れぬ内側には、放浪・無頼・大酒でくくられてきた作家・評論家坂口安吾とは異なるナイーブで自らの思想づくりに努力を傾けていた安吾の姿がみえる。この姿こそ、安吾の実像ではないか。

…

安吾にとって、小田原時代が無かったならば、戦時中の『日本文化私観』も生まれなかったし、戦後『墮落論』や『白痴』をきっかけに華々しく再登場するかたちもことなっていたであろう。

（金原左門著「坂口安吾と三好達治－小田原時代」（夢工房 2001年）まえがきより）

## ■坂口安吾「ぐうたら戦記」

…「ぐうたら戦記」は日支事変から太平洋戦争の開幕を告げる十二月八日までの坂口安吾の行動を描き、それを八月十五日の終戦の詔勅に重ね合わせている。坂口安吾によれば、「長い戦争の年月を通過して、やっぱりこの日（十二月八日）は最も忘れ得ぬ日であり、なつかしい日」であったから、それを考えることは、戦争を考えることであった。

…

（「定本 坂口安吾全集 第三巻」（冬樹社）「解題」より）



## ■牧野信一 坂口安吾君の『黒谷村』を読む

1935（昭和10）年6月28日、29日

「新潟新聞（夕刊） 第一九四五一号、第一九四五二号」（新潟新聞社）に文芸批評として掲載された。

牧野は昭和6年『文藝春秋』7月号巻末折込みの「別冊文壇ユウモア」に「風博士」という文章を掲載、坂口安吾を「変な、傑れた小説」の書き手として文壇に紹介、以後自らの主宰する『文科』同人に加えるなど親交を結ぶ。



## ■朗読者について 部 英治（しとみえいじ）

福島県白河市出身。劇団シェイクスピア・シアターにて約10年活動し、退団後文芸作品の朗読を始める。

2004年～「文鳥舎ことのはライブ」にて、小森陽一氏、古井由吉氏、池内紀氏等をゲストに迎え、牧野信一作品を連続朗読。

その他の主な朗読作品（台本演出）：「復活」「幼年時代」（トルストイ）、「キリストの樅ノ木まつりに召された少年」（ドストエフスキー）、「ゼロ弾きのゴーシュ」（宮沢賢治）、「クリスマス・キャロル」（ディケンズ）、「たんぼぼ」（ヴォルフガング・ボルヒェルト） グローブ文芸シアター主宰。

